

# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



### 合田 直弘

2024年、英国と愛国の数値を合算した統計で、自身初めてとなるリーディングサイヤーの座に就いた、ダークエンジェルが今月のこのコラムの主役だ。

英国と愛国におけるリーディングサイヤーは、11年連続でその座にあつたガリオが、21年に陥落。その21年と23年がフランス、22年がドウバウイ、そして24年がダークエンジェルと、戦国模様を呈している。

05年に愛国で生まれたのがダークエンジェルで、そのトップラインは、アクラメーション、ロイヤルアプローズ、ワジブ、トライマイベストを経てノーザンサンサーに至るといふ、ノーザンサンサー系の中では傍流に属する父系の後継馬である。

母は未出走馬で、祖母はLRトラファルガーハウスプリント(芝5F10Y)を含めて3勝をあげた馬だったが、3代母は未勝利馬で、すなわち牝系も上質とはいえない難く、1歳夏にドンカスター・セントレジャーセールという、英国の1歳市場の中で垂流のマーケットに上場され、そこで6万1千ギニー(当時のレートで約1446万円)で購買された。

バリー・ヒルズ厩舎の一員となつたダークエンジェルは、仕上がり早かつたようで、2歳の4月18日にデビュー。2戦目で勝ち上がった後、ロイヤルアスコットのLR

ウインザーキャッスルS(芝5F)が11着、ニューマーケットのG2ジュライS(芝6F)が4着と連敗したが、続くヨークの条件戦(芝6F)を制して2勝目をマーク。ドンカスターのG2フライングチルドラス(芝5F)は7着に大敗した後、ニューバリーのG2ミルリーフS(芝6F)を制し重賞初制覇。さらにニューマーケットのG1ミドルパークS(芝6F)も制し、G1初制覇を果たした。

その後、G1デューハーストS(芝7F)では9着に大敗したダークエンジェルは、9戦4勝という成績で2歳シーズンを終えた。

この段階で同馬の買収に動いたのが、同馬の生産者であるイエオマンズタウンスタッドで、買戻しに成功したイエオマンズは、3歳の短距離馬にとってシーズン前半に適鞍が少ないことを鑑み、2歳シーズン限りで現役を退き、3歳春から種牡馬として繋養するという、大胆な決断を下した。初年度となつた08年に種付け料は、1万ユーロだった。

11年に競走年齢に達した初年度産駒から、ロイヤルアスコットのG1ダイヤモンドジュビリーS(芝6F)やニューマーケットのG1ジュライC(芝6F)を制したリーザルフォースが出現。周囲が期待した通り、スピードタイプのA級馬をいきなり輩

出したことで、種牡馬ダークエンジェルの信頼性が一気に高まり、集まる繁殖牝馬の質も向上。その結果、17年の欧州最優秀短距離馬ハリエンジェル、20年の欧州最優秀短距離馬バスターシユといった、超大物の登場に繋がった。

種牡馬ランキングでは、13年に第9位に入つて初のトップ10入り。15年に第4位まで躍進して初のトップ5入り。さらに17年には2位まで浮上。その後もトップ10圏内を維持し続けた。

こうして迎えた24年、6月のロイヤルアスコットでチャリンがG1クイーンアンS(芝8F)を、カーデムがG1クイーンエリザベス2世ジュビリーS(芝6F)を制覇。この段階でリーディングの首位に台頭した。その後、ドウバウイに逆転された時期もあつたが、チャリンがG1クイーンエリザベス2世S(芝8F)を制した10月になると、首位に再浮上。そのまま逃げ切り、リーディング初奪取を果たしたのである。皆様ご存知のように、ダークエンジェルは24年、日本でも産駒のマッドクールがG1高松宮記念(芝1200M)に優勝。日本の競馬への適性もあることを実証している。

20歳を迎えた今年も6万ユーロの種付け料が設定され、ダークエンジェルは18年度の種付けシーズンに突入している。